

干潟・アサリ・アサクサノリ 復活 夢プラン

2026.1.1 中瀬

昭和35年、東京港には広大な海苔ひびが広がり、干潟が広がっていた。

明治時代の東京湾の漁業は、アサリ、ハマグリ、海苔、ボラ、エビの漁場になっていた。

アサクサノリの養殖は品川から葛西にかけての広範な海域で行われていた。これらの海産物も埋め立ての広がりとともに縮小し、東京都内の海苔養殖は全廃することとなった。その後は東京港の開発・重化学工業の発展の陰に隠れて、臨海部は生き物の海とは見られなくなつた。しかし、どっこい海はそれでも生きている。

今、羽田沖や東大島に近い荒川ロックゲート北側の荒川河岸には大な干潟が広がり、蟹やハゼや鳥が遊んでいる。

荒川の自然干潟

一度は忘れられていた東京港の生き物があちこちに戻って来ている。

漁業が戻らないまでも、海産物は再生の動きになつていて。隅田川の両国橋でもアサリが見られるとも言う。アサクサノリ復活を夢みることも出来るかもしれない。

かつて、海苔は東京の重要な産業商品で、羽田沖から江東区地先海浜では海苔養殖が展開されていた。

大田区立郷土資料館には東京湾で江戸時代の中頃に始まった海苔生産の歴史や、道具が展示されている。その海苔生産用具は、平成5年12月に国の『重要有形民俗文化財』に指定されている。



このアサクサノリをトキのように復活することは興味深く、意味深いと思う。

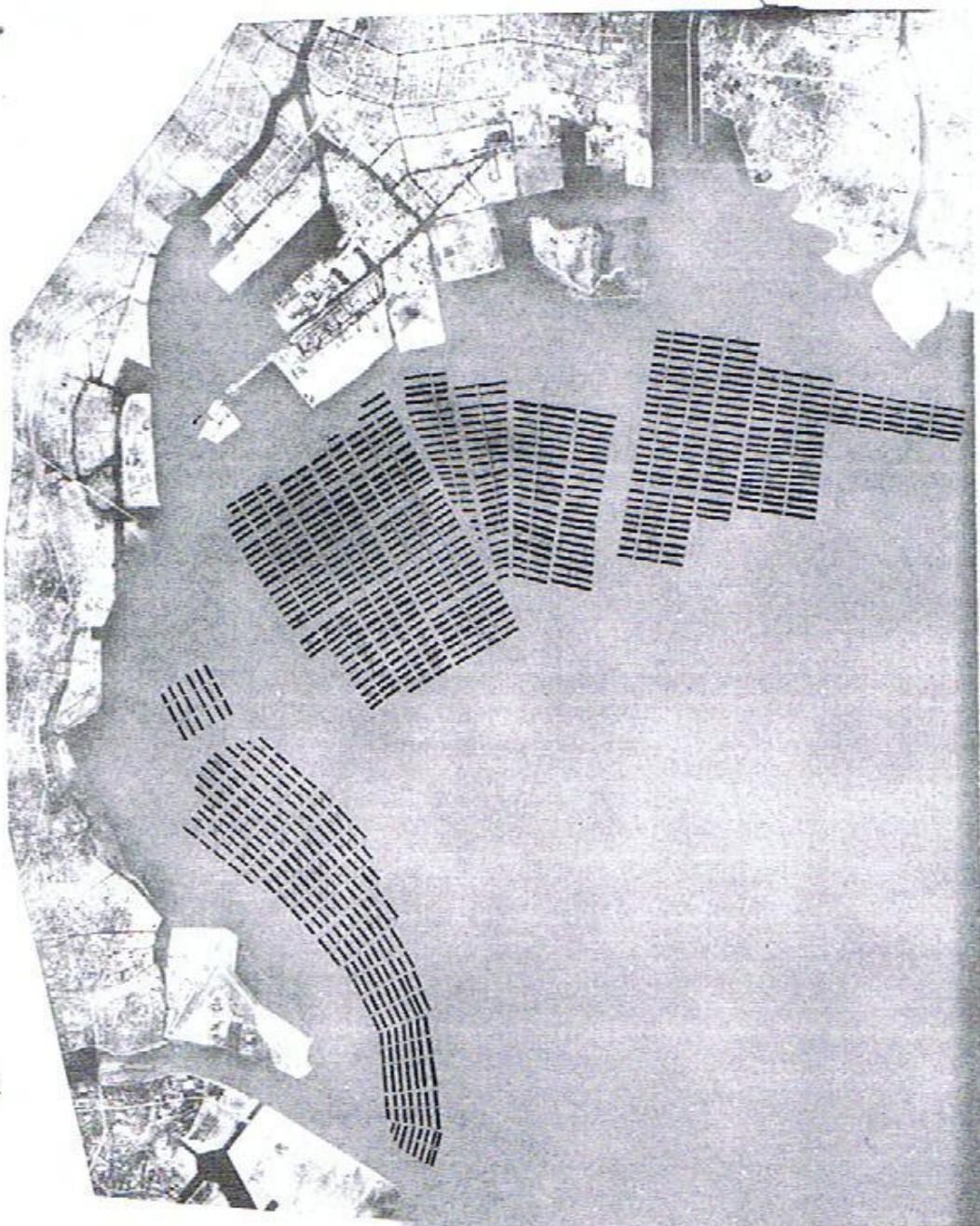
また、多摩川河岸に広がる干潟や葦原が周辺干潟・人口干潟へと拡大すること、そして豊かな生態系の場所となり、生物多様性が拡大することを期待したい！！

海苔漁場俯瞰図

(空から見おろした全東京都内の海)

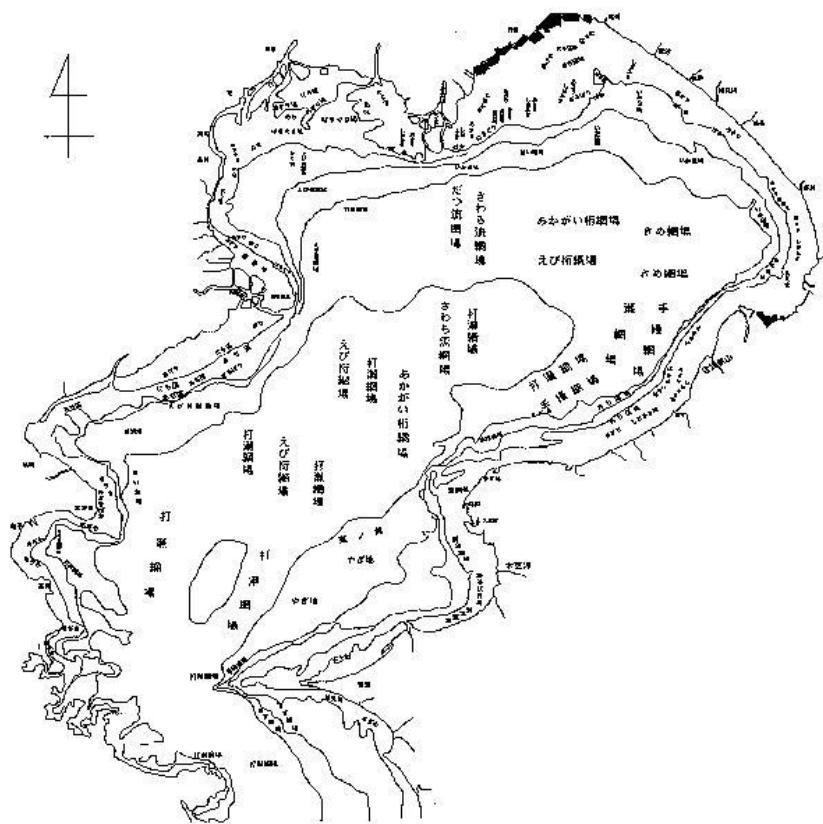
葛西 中
不老川 川

江戸川

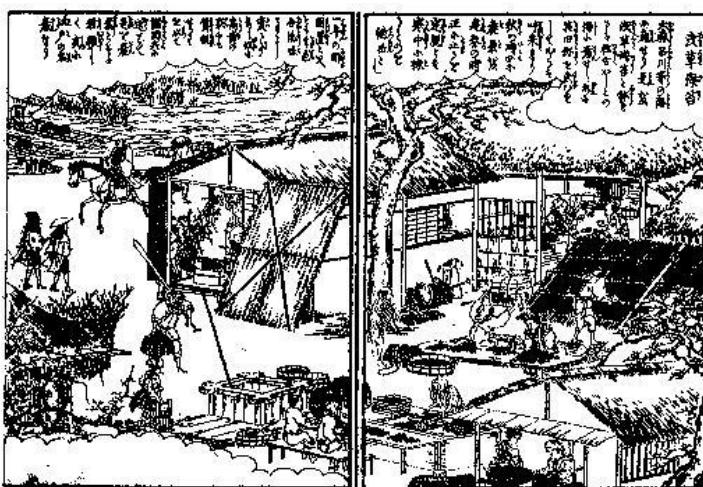


空から見た東京湾：昭和 35 年 2 月、羽田から南砂町を望んだ航空写真。

海苔ヒビが羽田から葛西沖まで広がり、アサクサノリは一大産業だったが、昭和 37 年漁業権を東京都が買い取り、江戸前の海苔産業は消滅した。その時の知事は鈴木俊一氏、都連漁業組合長は元区長の父・山崎孝太郎氏であった。



明治41年の東京湾漁業図（漁場調査報告）

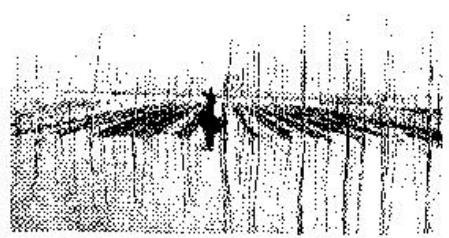


浅草海苔の製造・販売の様子 『江戸名所圖会』より（国立公文書館所蔵）

海苔養殖と製造



▲のり養殖場その1 (もうそう竹のび)



▲のり養殖場その2 (網ひび)



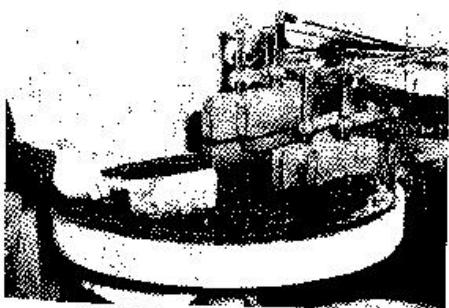
▲のりのつみ採り



▲のり抄き (よし養の上に「わく」を) のせ板 (ます) で抄く



▲のり下局

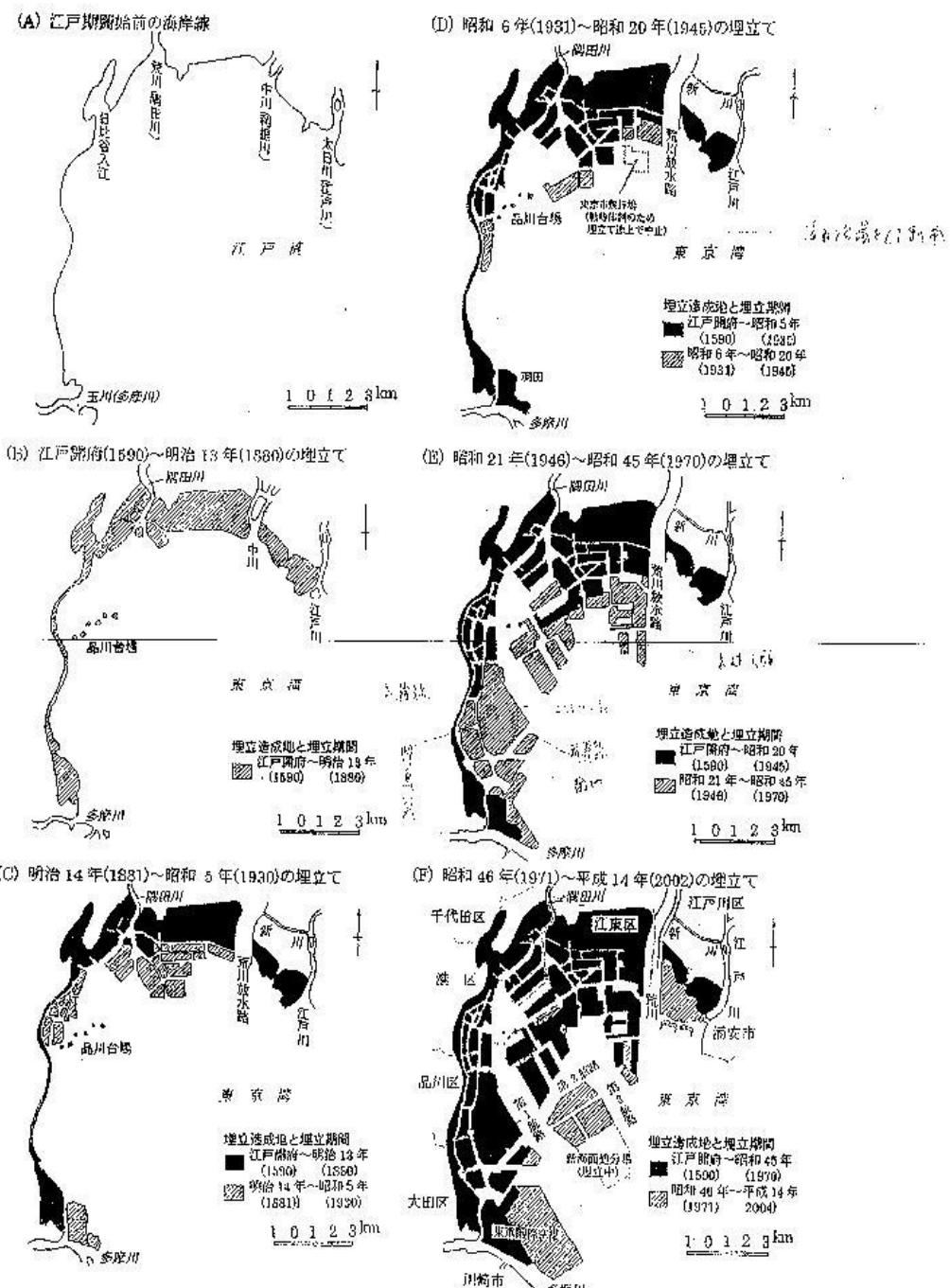


▲のり切り (抄く前の切断)



▲乾いたのりのはぎ取り

東京臨海部における埋立地造成の歴史



東京臨海部における江戸期開始の天正 18 年(1590) から平成 14 年(2002) までの埋立地分布の変遷
Chronological Changes in the distribution of reclaimed land in Tokyo Bay area from Tenshō 18th(1590) to Heisei 14th(2002).

(参考)

1. 『江戸東京の地誌』より

① 浅草海苔

浅草観音の仲見世などで売っていた江戸名物の乾海苔。元は宮古川（浅草付近の隅田川の称）で採れた海苔を加工して売り、芳香と色艶の良いことで有名となつたが、江戸の拡大とともに産地が隅田川河口から江戸湾へとひろがり、元禄ごろ（1688～1704年）には葛西方面や品川、大森、羽田あたりが主産地になった。

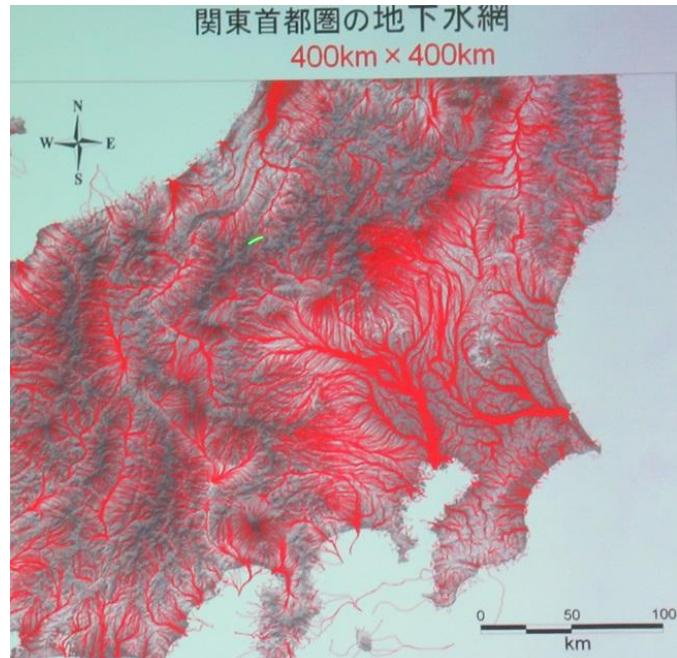
② 江東区・深川獵師町

寛永6年（1629年）、摂津方面から来た8人の者が、隅田川沿いの現在の清澄、佐賀、福住、永代、門前仲町の南部あたりを埋め立てた。かれらの名をとって新兵衛町、理左衛門町、藤左衛門町、次郎兵衛町、弥兵衛町、助十郎町、彦左衛門町、助左衛門町と名づけられたこの八か町は、獵師町と総称された。

深川獵師町を代表するものは、深川魚市場と黒江町の夕河岸である。活きたままの魚を売ることで有名であった。また、明治20年代以降には、海苔の養殖が行われるようになり、深川浦の乗りは良質であった。漁業協同組合は明治36年（1903年）に結成され、昭和36年まで存続した。解散の理由は、海水の汚染や埋め立てにより漁業権を放棄したためである。かつての深浜の漁師さんたちは、今でも深川八幡の本祭りで連合渡御の最後を務めている。

③ 江東区・砂町より

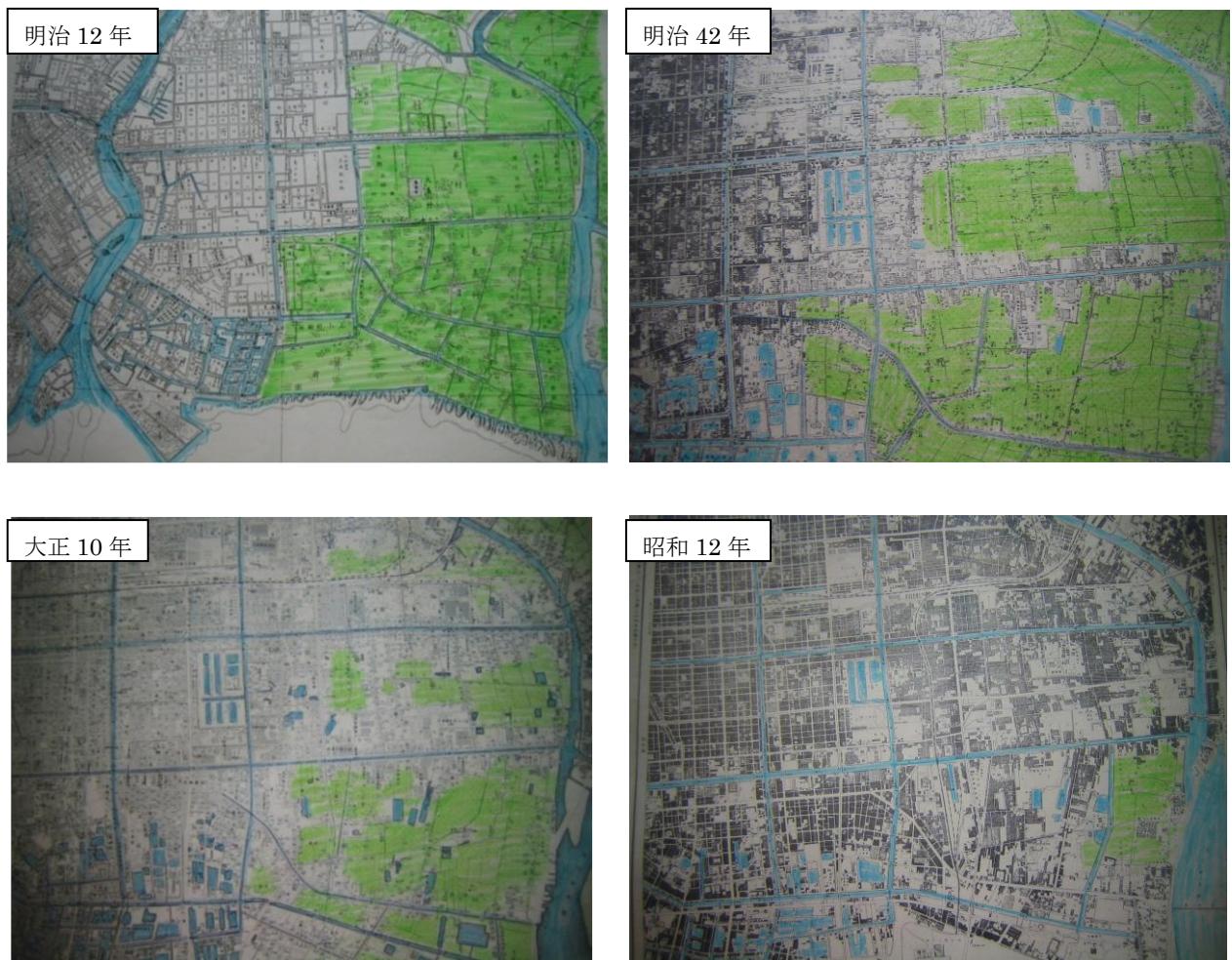
このあたりでは、おおくの家が半農半漁で、とくに海苔の生産がさかんであった。淡水と海水の出会うところでよい海苔が育つといわれ、荒川放水路の河口は絶好の場所であった。埋め立ての進行と海水の汚れにより昭和37年に漁業権を放棄するまで、冬の早朝は海苔干しの光景が見られた。現在では葛西橋付近にならぶ船宿に、その光景をしのべる。



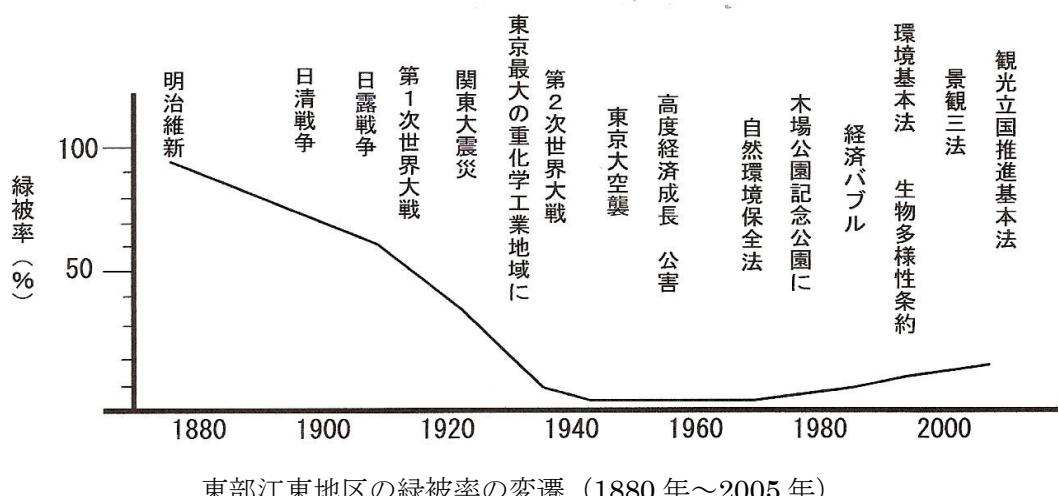
参考：葛西海浜公園はラムサール条約に登録された湿地で、冬に10万羽の渡り鳥がやって来ることで有名だ。そこは渡り鳥が食べることができる貝類の宝庫になっている。それを支えているのが関東首都圏の地下水網で、東京湾をドブにせずに、地下水網が江戸前を支えてくれてもいる。また、如何に地下水が重要であるかを知ることができる。

2. 東部江東地区の緑被率の変遷と工業の展開

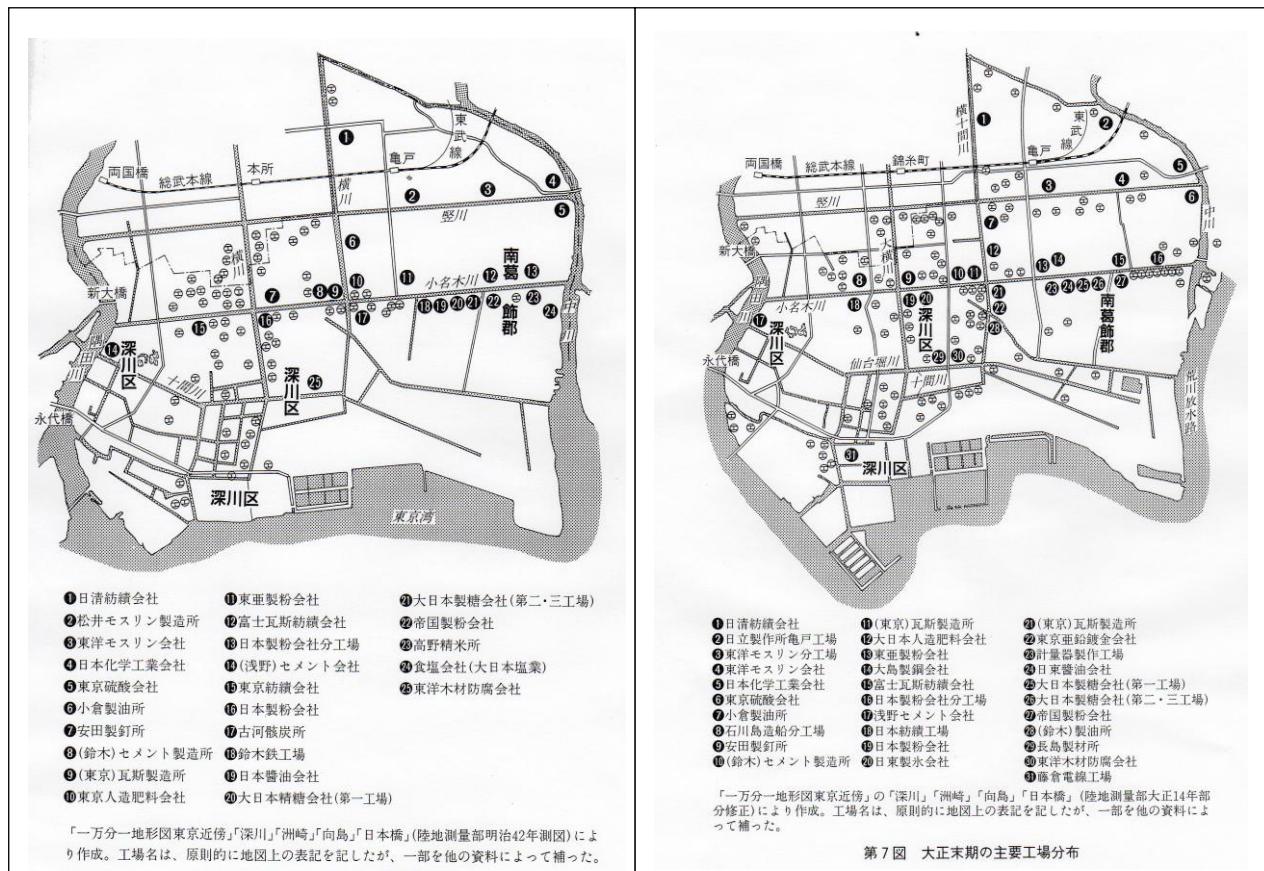
明治以降の東部江東区地域の変遷は、江戸時代から明治にかけては大消費地の江戸の近郊野菜生産地から始まり、一時は牧場が23か所もあるなど農業地区だった。しかし、明治30年代ごろから小名木川河川沿いに重化学工場の開発が進み、大正時代には日本の富国強兵をリードする先進大工業地帯になった。その間、田畠の耕作地は減少を続け、緑は減少した。



東部江東地区の緑被率は、下図のように、明治初期の95%であったものが日清・日露戦争、第一次世界大戦、関東大震災、第2次世界大戦のはじまりの1940年には凡そ1%に減少した。



江東地区の工業の変遷（明治～大正時代）



明治40年代には小名木川沿いに工場が建設され、大正末期には堅川や亀戸周辺地域一体にも主要工場が広がり、日本一の重化学工業地帯であったことが知られる。正に水辺のまちであり、舟運が発達していたためだ。

しかし、大正時代以降工業用水として大量の地下水をくみ上げ続けたために、周辺地域は地下水位の下降、地盤の沈下となり、最大では4.5mにも達する累積沈下量を示し、江東区と江戸川区はゼロメートル・マイナス地域になった。

そのために、荒川や隅田川の水位が江東区内の地域よりも高くなり、水門を設け、地区内を常時ポンプで水を排水しなければならなくなつた。扇橋閘門や荒川ロックゲートはそのために建設された。

